

## 周南市民はイベントに何を求めているか？

What do Shunan citizens want from the events ?

水崎 佑毅                      黒崎 辰馬                      櫻木規美子  
(神戸医療未来大学)        (神戸医療未来大学)

キーワード：イベント、ニーズ、地域差、スポーツ

### 1. はじめに

第3期周南市観光ビジョン（周南市地域振興部，2020）では，令和2～6年の間に取り組む観光振興施策についてまとめられており，その中で令和6年までに年間観光客数を180万人にすることが目標として掲げられている．そのため，観光コンテンツ等の充実や観光誘客の推進を基本方針とした取り組みが期待されており，中でもイベントの開催は重要な取り組みの一つとして位置づいている．周南市では，四季の祭事や花火大会だけではなく，周南市の地域特性を活かした港祭りや郷土伝統芸能祭，他にもスポーツや環境問題，科学をテーマにしたイベントなど，実に様々なジャンルのイベントが毎年数多く開催されており（周南市観光交流課，n.d.），その成果は周南市の観光客数の増加に貢献している．事実，周南市の観光客数は2009年からの9年間で約43万人増加し，2018年時点で165万人まで達している（周南市地域振興部，2020，pp.8）．こうしたことから，令和6年の年間観光客数180万人を達成するためにも，イベント参加者を対象にした調査は重要な役割を持つといえる．周南市の2013年から18年までの主な集客状況については，イベント，温泉，ソレーネ周南，文化会館，動物園の5つの事業を中心に結果がまとめられており，イベント事業による集客が最も多く6年間の平均集客数は約45万人であった（周南市地域振興部，2020，pp.9）．また，周南市の2013年から18年までの主な集客状況②のグラフでは，美術博物館，コンベンション，スポーツイベント，長田海浜公園，回天記念館の5つを主要な観光施設やイベントとして結果がまとめられている（周南市地域振興部，2020，pp.9）．このことから，周南市ではイベントの中でもスポーツイベントの位置づけが高いことが伺える．実際に2015年には5つの中で最も高い集客数である約16万人を記録している．よって，周南市ではイベントの中でもスポーツイベントへの注目度が高いといえ，スポーツイベント参加者への調査は年間観光客数を増やすための手がかりとなり得るかもしれない．

スポーツイベントについては，経済，社会，環境の3つの視点からそれぞれの効果を調べる研究が盛んである．スポーツイベントの経済効果については，大型のスポーツイベントによって雇用効果が生じる可能性があること（Feddersen and Maening, 2012），社会効果については，地域アイデンティティの醸成や地域活動や各種交流の促進，地域情報の発信に繋がること（木田，2013），環境効果については，自然環境への保護意識が高まる可能性があること（Jin et al., 2011）が報告されている．

こうしたポジティブな効果がある一方で，これらの効果については明確な根拠は提示されておらず（山口他，2018），スポーツイベントの効果は一時的であるといった指摘もある．事実，同じイベントであっても，支出額の総額が異なるといった経済効果の違いが報告されている（原田，2008）．よって，イベント開催によって多くの集客を得られたとしても，その効果は継続的に得られるものではないといえる．実際に，周南市のスポーツイベントによる2014年の集客数は約10万人を達成していたが，2018年には約6万人まで減少している．また，集客数減少の背景には，運営者不足による実施回数の低下やプログラムのマンネリ化，限られた予算内での開催など，実に様々な問題も関係しており，これらの問題以外にも，地域特有の問題が原因となりスポーツイベントによる集客者数が減少している可能性もある．

そこで本研究では，周南市の観光客増加の一助となっているスポーツイベントに着目し，周南市民のスポーツ

イベントに関するニーズを探索的に調査することを目的とした。また、参加者自身の運動・スポーツ活動の実施頻度の高さは日常生活の充実感と関係していることから（スポーツ庁健康スポーツ課, 2023）、運動・スポーツの実施率が高い人はスポーツイベントに積極的に参加している可能性がある。そこで、過去から現在までの運動・スポーツの実施率やその頻度も調査することを目的とした。また、スポーツ以外の活動についても同様に調査を行うこととした。

## II. 方法

### 調査対象者

本研究では、周南市内および市外で開催されたイベント参加者に声をかけてアンケートへの協力をお願いした。具体的には、兵庫県で著者らが開催した親子で参加できる運動・スポーツ教室や周南市および山口市で開催された複合型のスポーツイベント内、部活動の地域移行に向けた小・中学生を対象としたイベント内でアンケートへの回答を求めた。実施期間は2023年8月～12月までであり、74人（男性15人、女性57人、回答しない2人）から回答を得た。調査の目的及び倫理的な配慮については口頭で説明を行い、その後に調査協力への可否を判断してもらった。また、アンケートの途中であっても回答を中断して良いことを伝えた。

### 調査方法

Google社が提供するアプリケーションの一つであるGoogle Formsを利用して行った。調査内容は、「あなた自身について」と「お住まいの地域で開催されるイベントについて」の2つであった。「あなた自身について」では、年齢、性別、現在住んでいる地域、これまでの移住歴、小学校～現在までの運動・スポーツ実施歴、現在の運動・スポーツ実施状況、小学校～現在までの文化活動実施歴、現在の文化活動実施状況を尋ねた。「お住まいの地域で開催されるイベントについて」では、ジャンル、参加回数、規模、イベント会場までの距離、参加の決め手、イベント情報の入手方法について尋ねた。

## III. 結果

### 調査対象者の属性および移住歴

対象者の属性および移住歴については表1, 2に示した通りである。男性15名(20.3%)、女性57名(77.0%)であり、年齢別にみると18～29歳の38人(51.4%)が最も多く、続いて40～49歳17人(23.0%)、30～39歳16人(21.6%)であった。居住地別では、山口県内が最も多く、内訳別にみると周南市17人(23.0%)、防府市12人(16.2%)、山口市12人(16.2%)、宇部市10人(13.5%)の順が多かった。山口県外は東京都1人(1.4%)と兵庫県5人(6.8%)であった。移住歴については、生まれた時から同じ地域に住んでいる人が約半数以上であった。続いて、出身地とは異なる地域に住んでいる人は18人(24.3%)、出生地から都市部に移った後、出生地に戻ってきた人は11人(14.9%)であった。

表1. 対象者の属性

N=74			n (%)		
<b>性別</b>			<b>居住地</b>		
男性	15	20.3	山口県内	68	91.9
女性	57	77.0	山口県外	6	8.1
回答しない	2	2.7	(山口県内の内訳)		
			周南市	17	23.0
<b>年齢</b>			光市	4	5.4
18～29	38	51.4	下松市	4	5.4
30～39	16	21.6	田布施町	1	1.4
40～49	17	23.0	岩国市	2	2.7
50～59	2	2.7	防府市	12	16.2
60～69	1	1.4	山口市	12	16.2
			美祢市	1	1.4
			萩市	2	2.7
			山陽小野田市	3	4.1
			宇部市	10	13.5
			(山口県外の内訳)		
			東京都	1	1.4
			兵庫県市川町	2	2.7
			兵庫県福崎町	3	4.1

表2. 対象者の移住歴

	N=74	n (%)
<b>移住歴</b>		
生まれた時から同じ地域に住んでいる	42	56.8
出生地とは異なる地域に住んでいる	18	24.3
出生地から都市部に移った後、出生地に戻ってきた (Uターン)	11	14.9
都市部から地方に移ってきた (Iターン)	0	0.0
出生地から都市部に移った後、出生地とは異なる地域に住んでいる (Jターン)	3	4.1

### 周南市民と周南市民以外の比較：運動・スポーツの実施について

周南市民17人（男性2人，女性15人）を対象に小学校時代から大学時代までの運動・スポーツの実施状況についてまとめた。まず，運動・スポーツクラブや部活動の加入率は中学校時代が最も多く，小学校，高校，大学とだんだん減っていく傾向が確認できた（図1）。この傾向は，周南市民以外57人（男性13人，女性42人，回答しない2人）も同様であった（図2）。現在の加入率は，周南市民は18%，周南市民以外は14%であり，どちらも70%以上の人が入会していなかった（図3, 4）。運動・スポーツの実施率は，周南市では少なくとも月1～3日程度運動をしている人は6人（35%），周南市以外では32人（56%）であり，周南市民以外の方が運動をしている人は多かった。運動・スポーツの実施時間では，周南市民は30分未満が最も多く（23%），周南市民以外は30分～1時間（25%）が最も多かった。それ以外の実施時間では大きな違いは見られなかった。最後に，今後，運動・スポーツ実施に関わる質問では周南市民に比べ，それ以外の方が定期的ではなくても既に運動をしている人が多かった（周南市民：0% vs 周南市民以外：19%）。

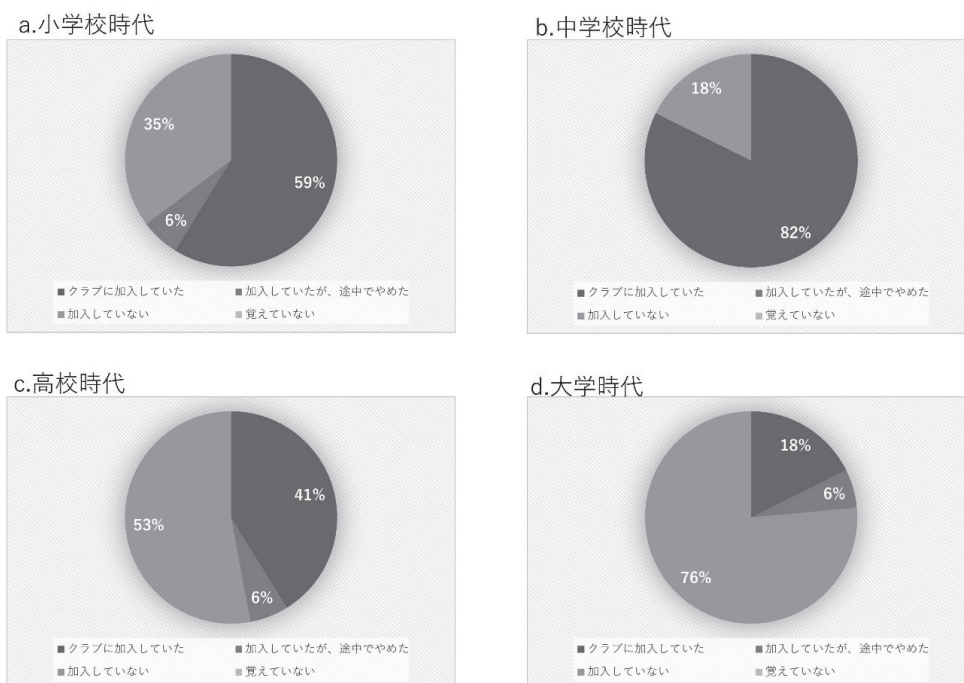


図1. 周南市民の過去の運動・スポーツクラブへの加入率

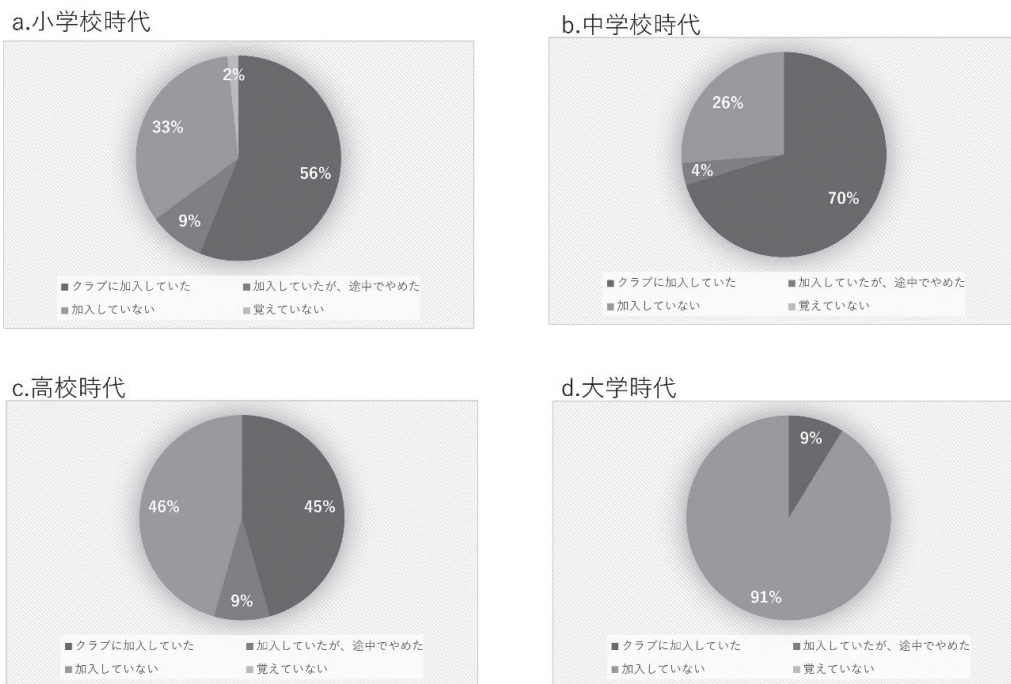


図2. 周南市民以外の過去の運動・スポーツクラブへの加入率

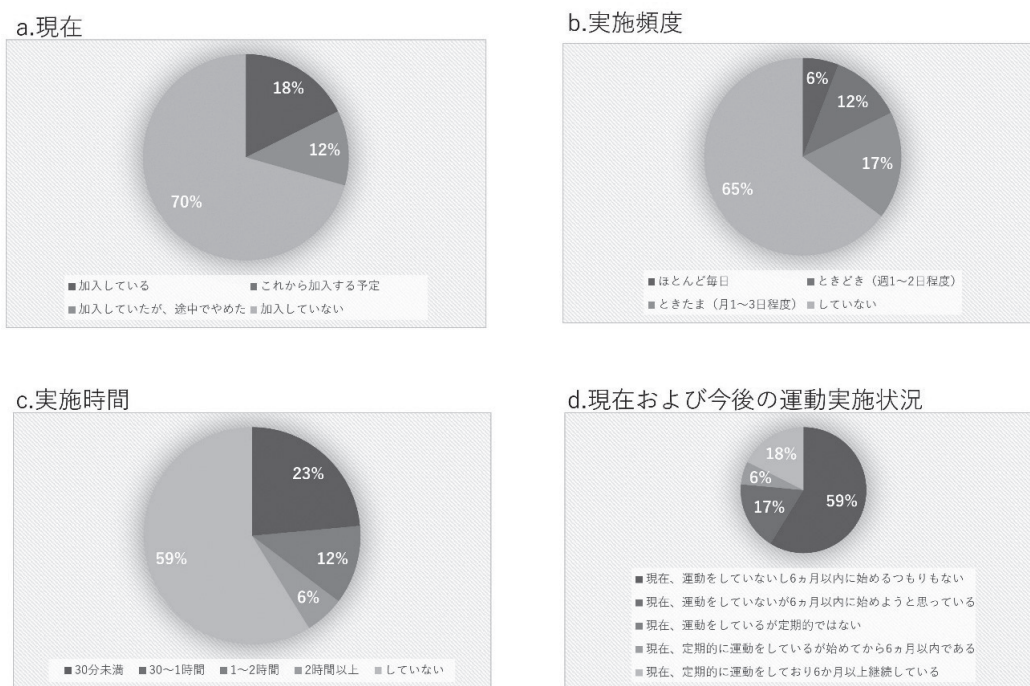


図3. 周南市民の現在の運動・スポーツクラブへの加入率および実施状況

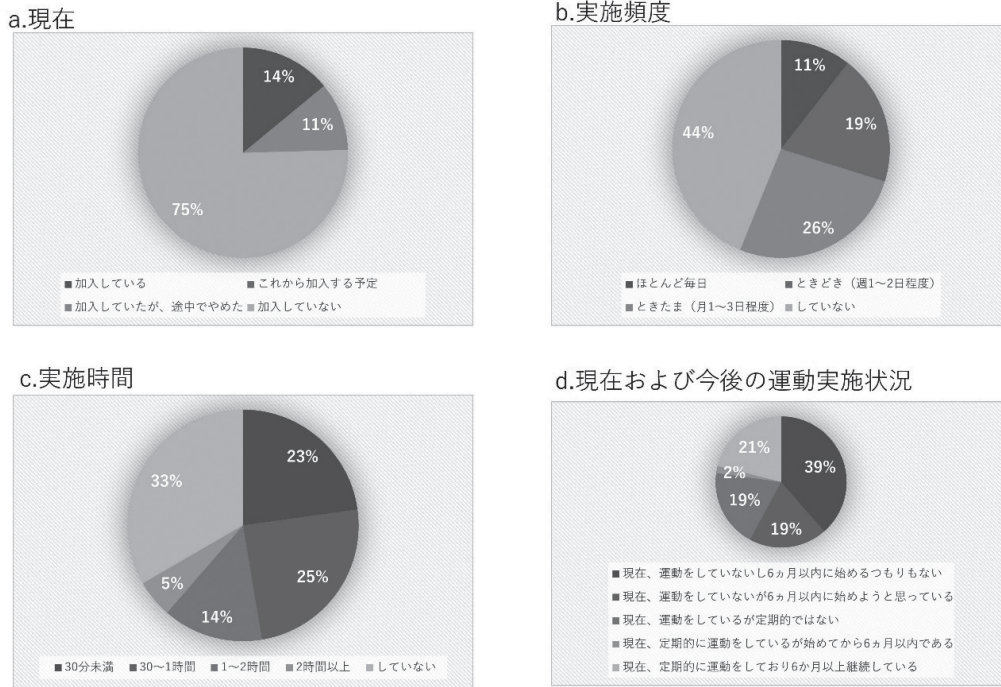


図4. 周南市民以外の現在の運動・スポーツクラブへの加入率および実施状況

周南市民と周南市民以外の比較：文化活動の実施について

周南市民の文化活動の加入率は高校時代の47%が最も多かった(図5)。周南市民以外では小学校と高校時代の37%が最も多かった(図6)。現在の加入率は、どちらも加入していない人がほとんどであった(図7, 8)。文化活動の実施率は、周南市では少なくとも月1～3日程度文化活動をしている人は2人(12%)、周南市以外では8人(14%)であった。実施時間では、周南市民は30分未満からそれ以上実施している人は3人(18%)であり、周南市民以外では9人(16%)であった。今後の文化活動の実施については、周南市民に比べ、周南市民以外の方が文化活動を始めようと思っている、もしくは既に活動している人が多かった(周南市民: 0% vs 周南市民以外: 23%)。

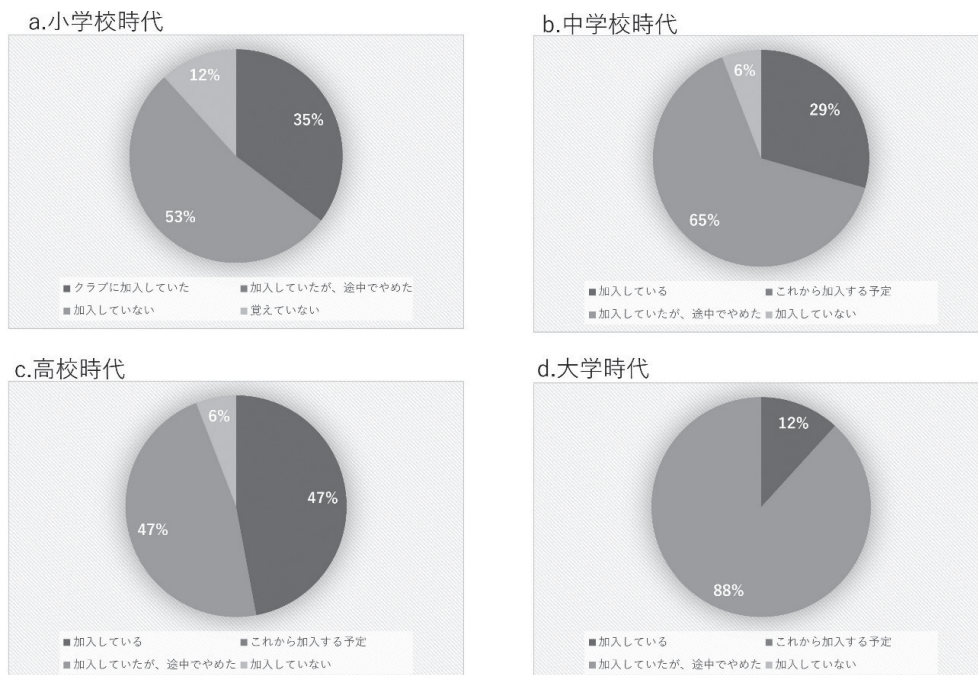


図5. 周南市民の過去の文化活動クラブへの加入率

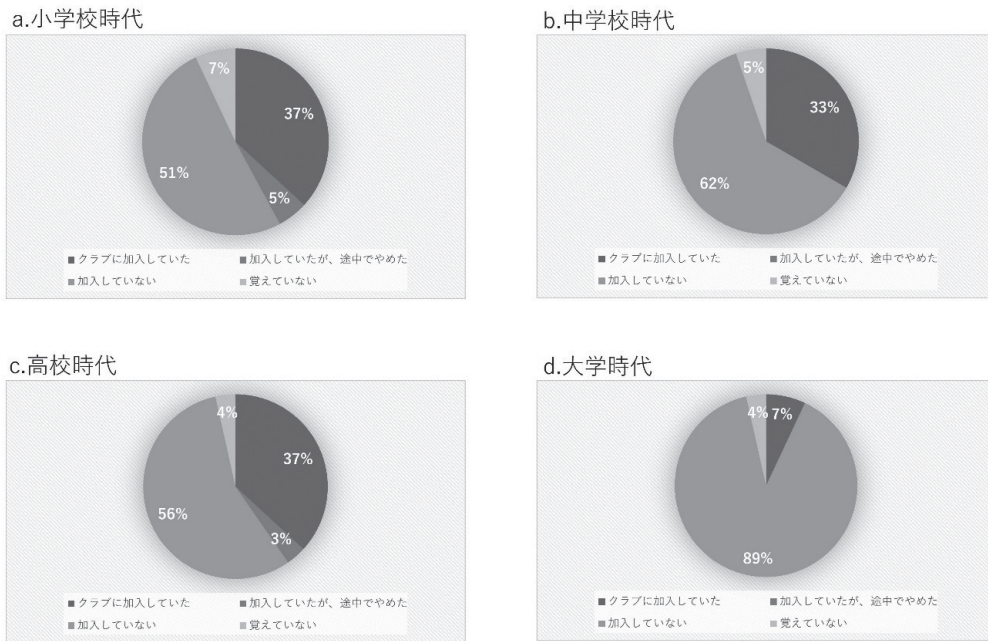


図6. 周南市民以外の過去の文化活動クラブへの加入率

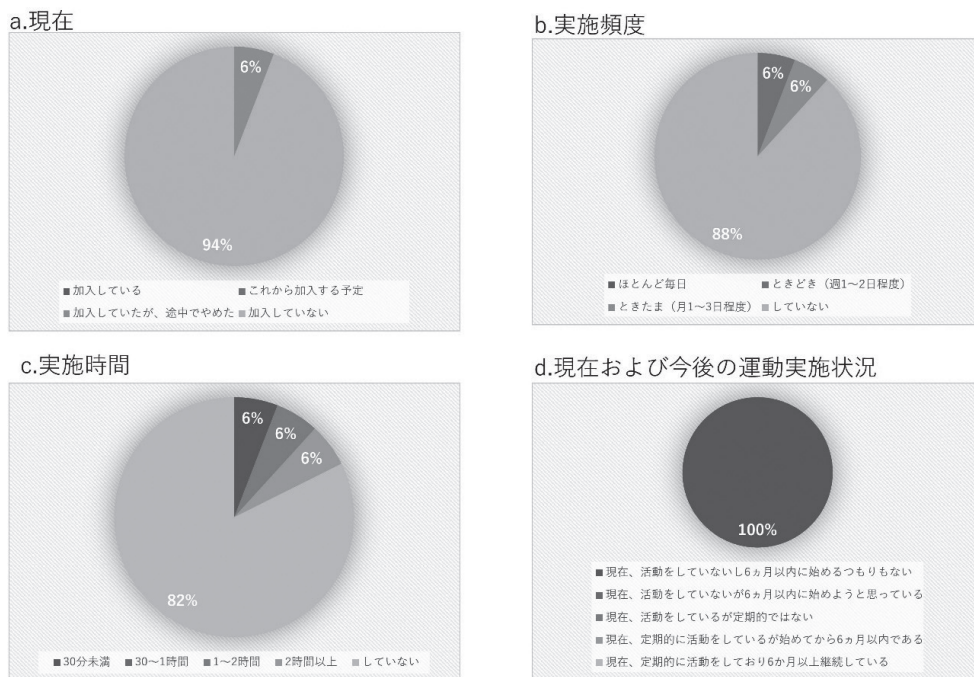


図7. 周南市民の現在の文化活動クラブへの加入率および実施状況

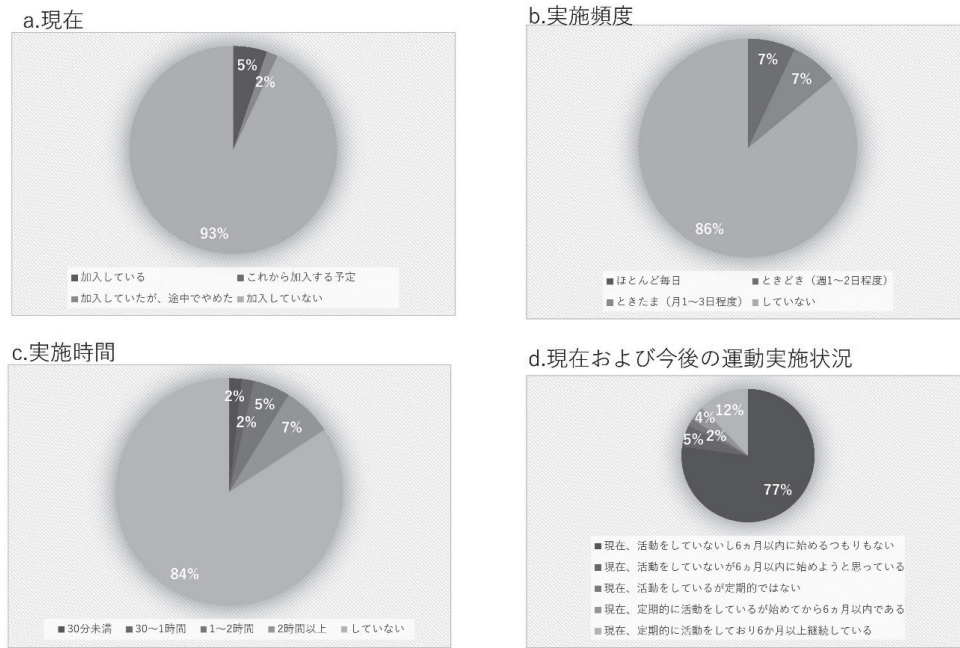


図8. 周南市民以外の現在の文化活動クラブへの加入率および実施状況

#### 周南市民と周南市民以外の比較：イベント参加について

これまで参加したことのあるイベントのジャンルについては、どちらもスポーツが最も多かった（図9）。次いで周南市民は音楽、子ども向け、行事の順で多く、周南市民以外は行事、子ども向け、音楽の順で多かった。今後については、周南市民は音楽、スポーツと子ども向け、エンターテインメントの順で多く、周南市民以外はスポーツ、音楽、子ども向け、行事の順で多かった。住居からイベント開催地までの距離については、周南市民では6～19kmと100km以上離れていたと回答した人が最も多く、周南市民以外では5km以内が最も多かった（図10）。今後については、周南市民は住居から19～39km離れていても参加すると回答した人が最も多く、周南市民以外では、5km以内が最も多かった。イベント規模では、周南市民は100～500人未満のイベント参加が多く、周南市民以外では100人未満規模が多かった（図10）。今後についてはどちらの地域もこれまでと同様の規模感を求めていた。イベント参加の決め手については、どちらも趣味・趣向に合っている、距離、料金設定の順で回答が多かった（図11）。イベント情報については、どちらもポスター・チラシ、ホームページ、ソーシャルネットワーク（SNS）から入手しているが、周南市民以外の方は口コミからも入手しているようであった（図12）。最後に、これまでのイベント参加回数の比較では、5回以上参加している人の割合は周南市民が64%、周南市民以外は49%であり、周南市民の方が多かった（図13）。



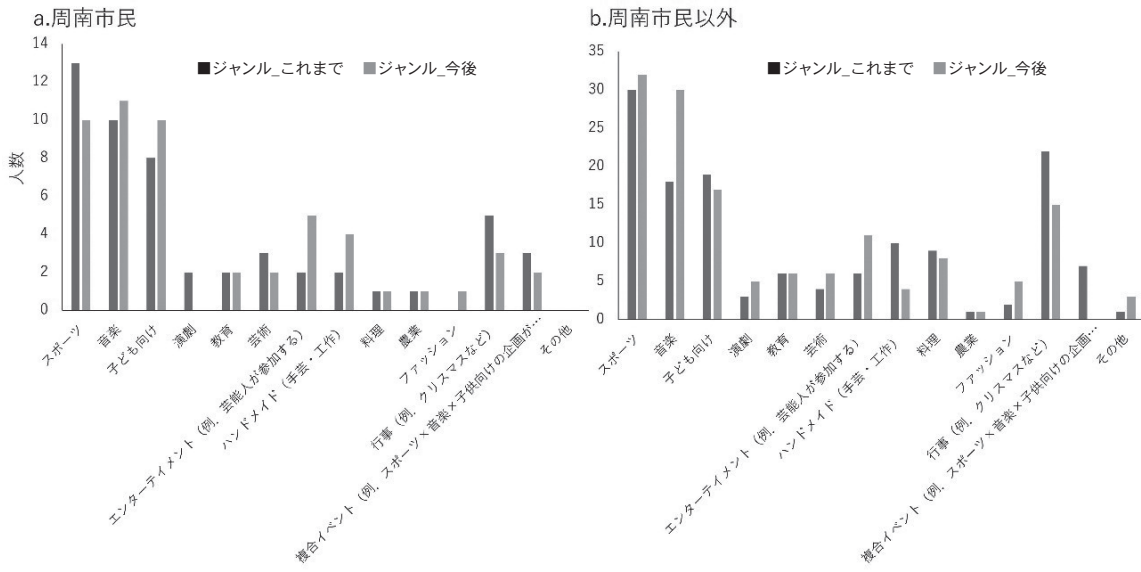


図9. 参加した及び今後参加したいイベントのジャンルについて

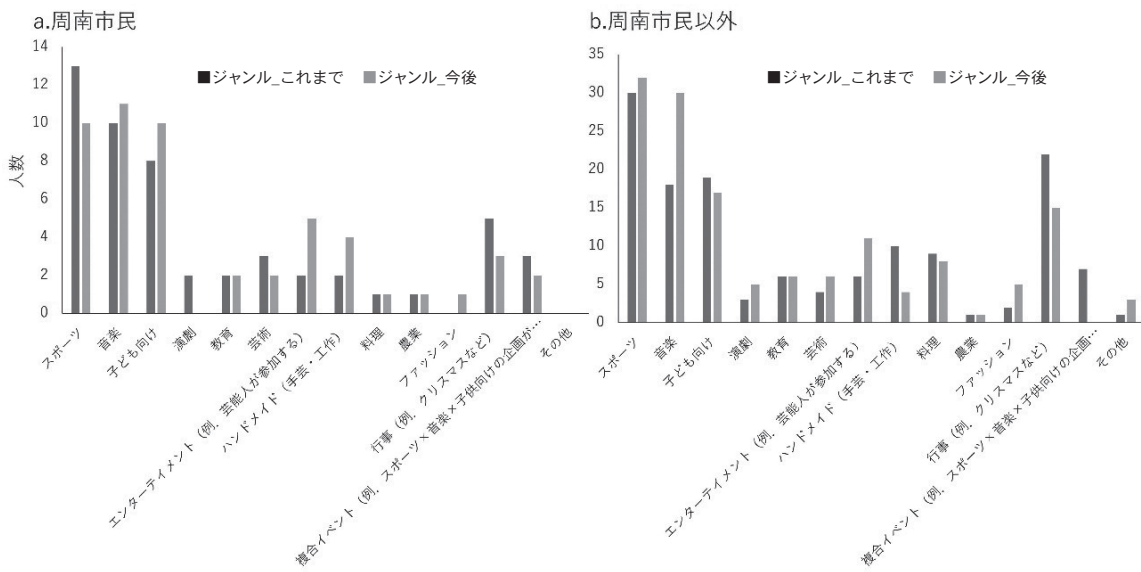


図10. 参加したおよび今後参加したいイベント会場までの距離と規模について

a.周南市民

b.周南市民以外

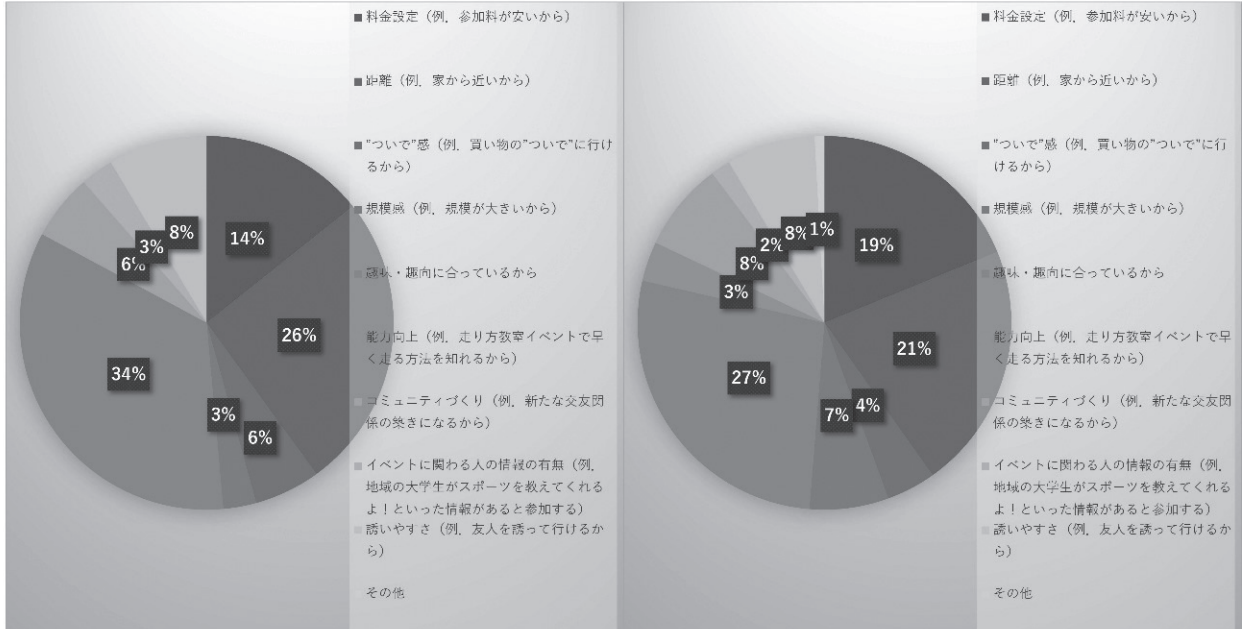


図11. イベント参加の決め手について

a.周南市民

b.周南市民以外

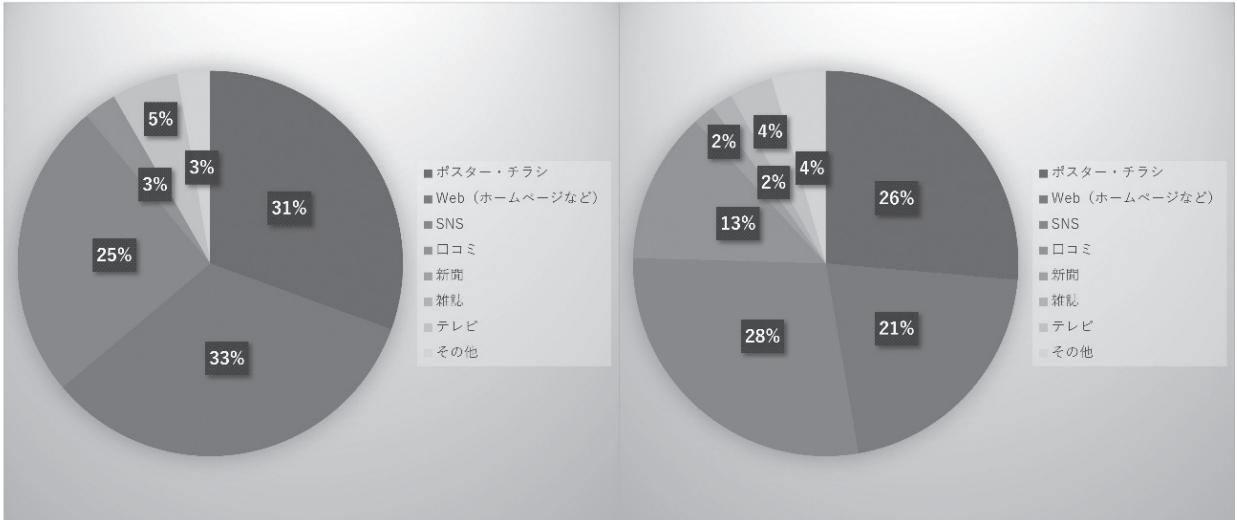


図12. イベント情報の入手方法について

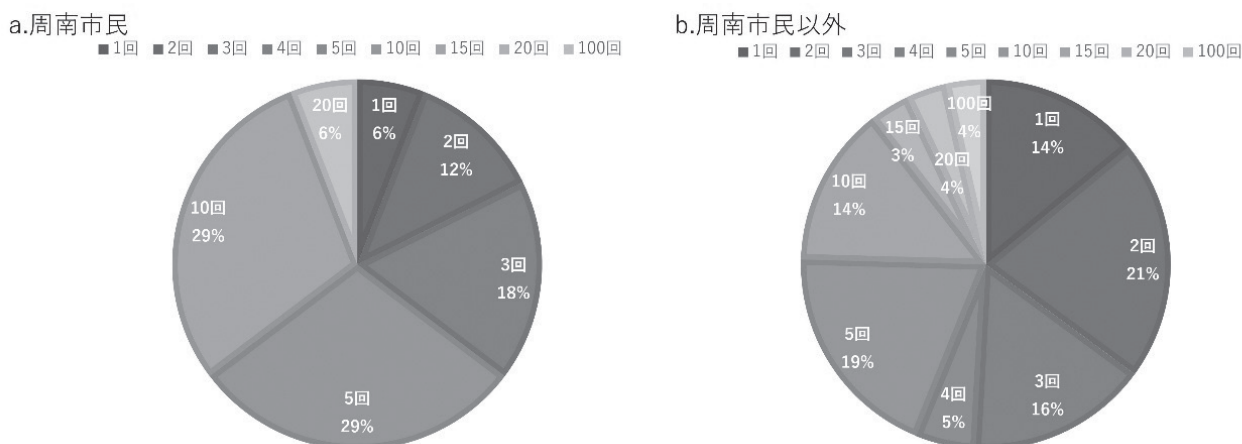


図13. イベントの参加回数について

#### IV. 考察

本研究は、周南市民のスポーツイベントに関するニーズを探索的に行うために、周南市民以外のニーズと比較し、異なる特徴が見られるか検討することを目的とした。その結果、参加者の属性は女性の特に子どものいる母親の参加が多く、また運動・スポーツ活動や文化活動への関わり方、イベント参加の状況やイベントに対するニーズに関して地域間で異なる特徴が示された。

まず本調査の対象者は18～49歳の女性が多かったことから、スポーツイベントには女性の参加が多いことがわかる。また、アンケートへの協力を直接呼びかけた時の印象を踏まえると、子どもを連れた親子からの回答が多かった。これらの結果から、男性よりも女性、もしくは母親の方がスポーツイベントに内在する社会的な効果に強く期待していると考えられる。運動・スポーツは、健康の保持増進や体力向上に寄与し、青少年にとっては人間形成に多大な影響を与えると謳われている（文部科学省，n.d.）。例えば、1日2000歩のウォーキングをすると寝たきり防止になることや生活の充実感が向上すること（スポーツ庁，2019）、また子どもの非認知能力の向上（山北他，2017）に貢献する可能性があることが報告されている。非認知能力の中には、パーソナリティ（人格）に関連する特性が多く含まれており（Heckman and Rubinstein, 2001）、具体的には共感性（他者の気持ちを共有し、理解する心）や自尊心（自分自身を価値ある存在だと思う心）、レジリエンス（逆境をしなやかに生き延びる力）といった特性があり、他の特性を合わせると全部で15の特性があると考えられている（小塩，2021）。このように、運動・スポーツは人類の心身の両面にわたる健全な発達に不可欠なものとされている。そのため、スポーツイベントには生活の質を高めること、相手を思いやる気持ちや多様性を認める意識を高めるといった人格形成に寄与する効果があることが示唆されている（山口他，2018）。よって、女性参加者は、運動・スポーツが持つ効果を意識的、もしくは無意識的に感じ取り、自分自身の心身の健康の向上や子どもへの教育効果を期待しているため、女性の参加者が多かったと考えられる。

参加者の運動・スポーツ活動および文化活動への関わりは、どちらの地域においても現在の加入率は20%以下であった。そのため、運動・スポーツおよび文化活動への関わりがスポーツイベントへの参加に直接的に関与している可能性は低いと考えられる。また、運動・スポーツの実施頻度では、月3回以上実施している周南市民は35%、周南市民以外は56%であった。この結果は、成人の週1日以上運動・スポーツ実施率（男性：58.5%、女性：54.1%）よりも低く（スポーツ庁）、特に周南市民は全国と比べて運動・スポーツを実施する人が少ないことが示された。

イベントへのニーズについては、どちらの地域においてもスポーツ、音楽、子ども向け、行事ごとのイベントに参加しており、今後も同様のイベントに参加したい人が多かった。また、これまでのイベントへの参加回数では、周南市民は他の地域の人たちよりも5回以上参加している人が多かったことから、イベントに参加する傾向が強いことが伺えた。イベント会場までの距離については、周南市民は他地域の市民に比べ、住居から40km程度離れた会場でのイベントに

参加する、もしくは参加したいと思う人が多かった。またイベントの規模感としては、100人未満、100人～500人未満の小規模なイベントを好む人が多かった。これらの結果を踏まえると、周南市では住居地から40km程度離れた会場でのスポーツイベントだけでなく、音楽や子ども向けといったジャンルを融合させた小規模な複合型のイベントにニーズがあるのかもしれない。実際に、イベント参加の決め手は、趣味・趣向に合っていること、住居からの距離、料金設定が重要であったことから、イベントの内容や参加料の設定だけでなく、住居からの距離を意識したイベントづくりが求められているといえる。最後に、イベントの情報収集については、どちらの地域においてもポスターやチラシ、ホームページ、SNSでの情報収集が多かったが、周南市では口コミによる情報収集は他地域に比べ少なかった。イベント参加後の満足度が高い場合は、イベントを支持するといったポジティブな口コミが増えることから（山口他, 2018）、口コミを増やすためのイベントの工夫も必要かもしれない。

## V. まとめ

本研究では、周南市の観光客数増加の一助となっているスポーツイベントに着目し、他地域との比較を通して、周南市民がイベントに求めることを探索的に調査した。今後、周南市民のスポーツイベントへの集客数を上げるためには、20代の女性や子どものいる母親をターゲットに、スポーツだけではなく、音楽や子ども向けのイベントを複合したイベントを開催し、さらに周南地域から40km圏内の場所で開催をすることが望ましいかもしれない。また、イベント参加後にポジティブな口コミが増えるように、参加者（特に女性）の満足度を高める工夫（例、運営スタッフ全体に対しての接客教育、費用対効果の明確化）が必要になってくるだろう。

今後の課題としては、本研究ではイベント会場にて直接アンケートへの協力を依頼する方法を取ったため、データに偏りが出た可能性は排除できない。また、データ数も十分とは言えない。今後は、オンラインによるアンケート収集や各自治体へ無作為にアンケート用紙を配布し、データの偏りやデータ数の問題を無くしていく方法を取る必要がある。また、対象としたイベント数も少ないため、今後はより多くのイベントを対象にした縦断的な調査が求められる。

## 【参考資料】

- 小塩真司編 (2021) 『非認知能力: 概念・測定と教育の可能性』, 北大路書房。
- 木田悟編 (2013) 『スポーツで地域を拓く』, 東京大学出版会。
- 周南市観光交流課, 「山口県周南市観光情報サイト そーなん!?!周南!」 (n.d.), <https://www.city.shunan.lg.jp/site/kanko/57984.html>(2023年12月18日閲覧)。
- 周南市地域振興部 観光交流課 (2020) 「第3期周南市観光ビジョン」, pp. 1-40。
- スポーツ庁, 「スポーツ庁Web広報マガジンDEPORTARE」 (2019), <https://sports.go.jp/special/value-sports/post-29.html> (2023年12月18日閲覧)。
- スポーツ庁健康スポーツ課 (2023), 「別紙 令和4年度「スポーツ実施状況に関する世論調査」の概要」, pp. 1-20。
- 原田宗彦 (2008) 「メガ・スポーツイベントと経済効果」, 都市問題研究, 60(11), pp. 80-94。
- 文部科学省, 「1 競技スポーツは人類の創造的な文化活動の一つである」 (n.d.), [https://www.mext.go.jp/a\\_menu/sports/athletic/070817/001.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/sports/athletic/070817/001.htm) (2023年12月18日閲覧)。
- 山北満哉, 安藤大輔, 佐藤美理, 鈴木孝太, 山縣然太郎 (2017), 「子どもの遊び・スポーツ経験と非認知能力の関連」, 笹川スポーツ研究助成研究成果報告書, pp. 339-345。
- 山口志郎, 押見大地, 福原崇之 (2018) 「スポーツイベントが開催地域にもたらす効果: 先行研究の検討」, 体育学研究, 63(1), pp. 13-32。
- Feddersen, A. and Maenning, W. (2012) "Sectoral labour market effects of the 2006 FIFA World Cup", *Labour Econ.*, 19(6): pp. 860-869.
- Heckman, J. J., & Rubinstein, Y. (2001) "The importance of noncognitive skills: Lessons from the GED testing program", *American economic review*, 91(2), pp. 145-149.
- Jin, L., Zhang, J. J., Ma, X., and Connaughton, D. P. (2011) "Residents' perceptions of environmental impacts of the 2008 Beijing Green Olympic Games", *Eur Sport Manag Q.*, 11(3): pp. 275-300.